

「全体的靈的平和 (ホリスティック・スピリチュアル・ピース)」概念の提唱

松本 孚 相模女子大学*

A Proposal of the Concept of “Holistic Spiritual Peace”

MATSUMOTO Makoto

はじめに

本論文の目的は、靈的な平和 (スピリチュアル・ピース) を定義することである。「spirituality」という言葉は、はじめ「トランスパーソナル心理学 / 精神医学会」では「靈性」と翻訳されていたが、この頃は「スピリチュアリティ」とカタカナ書きする場合が多くなった。ここでは両者を同じ意味で使うことにする。「靈性 (スピリチュアリティ)」という概念については、非常に多様な説があり、学会誌にレビュー論文も発表されている (安藤, 2001)。しかし、いまだ統一された見解に至っていないというのが現状であろう。では、靈性と平和の関係についてはどうであろうか。

平和と靈性との関係については、日本平和学会が 2007 年の機関紙において「スピリチュアリティと平和」という特集を組んで 6 本の論文を一挙に掲載している。この前にも僅かではあるが、平和学会のニューズレターの中で、民間信仰の中のスピリチュアルな対象について (Mwangi, 2002) や、環境と平和における「サブシステム」と「スピリチュアリティ」につ

いて (花崎, 2004) の報告が載っている。またトランスパーソナル心理学 / 精神医学会が 2007 年 3 月に出版した「スピリチュアリティの心理学」の中でも少し触れられてはいる (松本, 2007)。しかし本格的な研究報告は、上述の 2007 年 11 月に平和学会の機関紙に載った論文集であろう (2014 年 12 月現在)。

そこでこれらの論文の内容を概観してみる。まず巻頭言において「靈性や心の平和なくして真の平和はない」とか「靈性の回復やそれによる心の平和構築について議論する」という主旨のことが述べられているように (金, 上村, 2007)、平和にとって「靈性」が重要な要因であるという基本姿勢が示されていると考えられる。同様の姿勢は、「心の豊かさをどう見るか」という論文において、「精神性 (spirituality) を取り戻し、完成度を高めることを平和の基礎とする」という表現の中にも見ることができる (西川, 2007)。では、「靈性」とか「精神性」とも翻訳されている「スピリチュアリティ (spirituality)」そのものの内容についてはどのように捉えられているであろうか。

前述の金と上村は、鈴木大拙の著書である「日本的靈性」を引用して「靈性とは、物質と精神の両方を成り立たせる土台である」と述べている。小林は、「靈性」を靈的実在 (神、仏、天国、地獄、天使、悪魔、魂など) が存在する

* m-matsumoto@star.sagami-wu.ac.jp

とする「実在的靈性」と、人間の心における主観的精神性で靈的成長や精神性の向上を含む「主観的精神的靈性」に分けている（小林、2007）。これに対し島藪は、スピリチュアリティを「新靈性文化」と捉えており、この文化は、環境主義や自然との調和を目指す「緑のスピリチュアリティ」や、日々の非暴力実現から平和を目指す「心の平和を志向するスピリチュアリティ」などに分類されている（島藪、2007）。

一方、スピリチュアリティには、「文化から超越した根源性」と同時に「人と人との結びつきの媒介」という両義性があるという捉え方もある（稲垣、2007）。後者の人と人をつなげるものというスピリチュアリティの捉え方は、小林の、地球人として人間全員の尊厳や同胞愛を含む「地球公共的靈性」や「地球域的（グローバル）靈性」という表現にも示されている。またこの地球の靈性は、諸宗教の基底にある普遍的宗教性でもあるという（小林、2007）。この「宗教性」については、黒住が、自他、関係、世界、時空をも超えた次元として捉えている（黒住、2007）。

また平和学者が警戒するスピリチュアリティとして特徴的なのは、戦争へ向かう傾向である。例えば稲垣は、広い意味のスピリチュアリティの働きとして、願望、気迫、決断、意志などを挙げており、大和魂に見られるようにスピリチュアリティは戦争と平和の両方に向かい得ると言う（稲垣、2007）。小林もまた、靈性には、靈的精神性の成長、向上を表す「正の靈性（positive spirituality）」と、戦争推進を促した国家神道のような望ましくない靈性の形である「負の靈性（negative spirituality）」があると述べている（小林、2007）。

これまで見てきたように、平和学会の論文集に出てくるスピリチュアリティの捉え方は、かなり多様で統一された定義があるわけではない。またスピリチュアリティを平和につなげていくために具体的にどのように実践してい

ばよいかについては、ホリスティック教育やスピリチュアル系の様々なワークショップの紹介（島藪、2007）、靈的な原理に立脚した公共的活動としての「靈的公共活動（spiritual public action）」の提案（小林、2007）、巫者による靈的感受性を使った祈りによる平和実践の事例の紹介（佐藤、2007）などがなされている。しかし、それぞれの実践活動の前提となる「靈性」の捉え方に統一性がないため各実践間にもつながりがなく、どれをもって真の平和に向けた靈的（スピリチュアル）アプローチとするのかもはっきりしない。

そこで今回は、①まず、これまでの平和概念の変遷を概観することを通して、②平和にとっての靈的（スピリチュアル）視点の必要性について再検討し、③平和にとって有効な靈性（スピリチュアリティ）の定義と、それに基づく新しい平和目標として「全体的靈的平和（ホリスティック・スピリチュアル・ピース）」という概念を考察し定義することを研究目的とする。なぜなら、平和を新たに再定義することにより、これから平和について何を研究及び実践すべきか、その範囲を明確に示すことができるからである。

1 平和概念の変遷

これまでの平和概念の流れを大まかに振り返ってみると、「戦争がない状態が平和である」といったいわゆる古典的平和の概念から、ガルトゥング（Galtung）の直接（個人）的暴力のない状態を表す「消極的平和」や「直接的暴力だけでなく構造（間接）的暴力のない状態が平和である」とする「積極的平和」の概念まで、その意味内容の範囲が広がってきている（Galtung, 1969）。

スモーカーとグロフ（Smoker & Groff, 1996）は、平和概念の進化と称して6つの段階を示している（図1参照）。

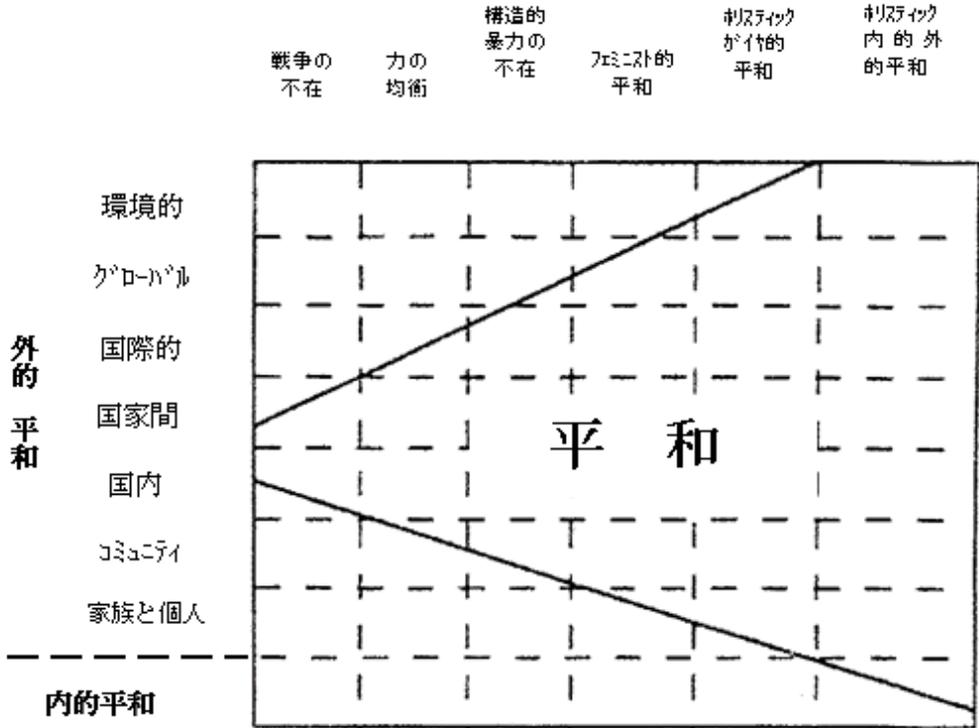


図1 平和の進化における6つの概念 (Smoker & Groff 1996 p.3より作成)

彼らは、横軸に、平和の6段階として、1段階目の「戦争のない段階 (absence of war)」から始まり、2段階目の武力をはじめとする「力の均衡 (balance of forces)」、3段階目にガルトゥングなどの言う貧富の格差や差別のないいわゆる「構造的暴力のない状態 (no structural violence)」、4段階目に女性や弱者に対する暴力のように家族や個人に対する暴力もない状態としての「フェミニスト的平和 (feminist peace)」、5段階目には、地球環境を人間と相互に作用しあう広い意味での生命体と捉え「ガイヤ (Gia)」と呼んで (Lovelock, 1988)、環境と人間との調和を平和とする「全体的ガイヤの平和 (holistic Gia peace)」、そして最後に、上述の1から5までの段階（「外面的平和 (outer peace)」)を含みつつ、それらをつなげていく「内面的平和 (inner peace)」をも含んだスピリチュアルな側

面を持つ「全体的内面的、外面的平和 (holistic inner and outer peace)」を位置付けている。

同図の縦軸をみると、まず「外面的レベル (outer peace)」と「内面的レベル (inner peace)」に大きく分かれており、上のほうに位置する「外面的レベル」は更に下から順（ミクロからマクロへ）に、「個人や家族のレベル (family and individual)」、「コミュニティのレベル (community)」、「国内レベル (within states)」、「国家間レベル (between states)」、「国際的レベル (international)」、「グローバルレベル (global)」、「環境レベル (environmental)」に細かく分かれている。そして、例えば、「横軸の戦争のない状態としての平和」は、縦軸の主に「国内レベル」や「国家間レベル」を対象としており、それが「構造的暴力のない平和」となると対象は広がり、下は「コミュニティレベル」、

上は「国際レベル」や「グローバルレベル」をも含むことになる。更に「フェミニスト的平和」となると、もっと下の「家族や個人のレベル」における暴力をも平和の対象とし、「全体的（ホリスティック）ガイアの平和」では、更に「環境レベル」も対象となる。そして最終段階である「全体的（ホリスティック）内面的外面的平和」では、心やスピリチュアルな側面などの「内面的レベル」が「外面的レベル」を含む全てのレベルを全体的につなげるという意味ではほぼ全体を対象にしていると考えられる（Smoker & Groff, 1996）。

ガルトゥングも近年では、暴力の種類に係わらず否定的な関係をなくすことが「消極的平和」であり、肯定的関係を作ることが「積極的平和」であるというように概念の再構成を行っている（Galtung, 2009）。これはガルトゥングの平和概念が、スモーカーとグロフの平和概念の進化段階に当てはめるなら第4段階の家族や個人のレベルにおける暴力のない状態を平和とする「フェミニスト的平和」にまで広がってきていると考えられよう。しかし、ガルトゥングのこの段階での平和概念は、やはり対象は人間と人間であり、人間が自然環境に与える暴力を問題にする「全体的ガイアの平和」をも含めてはいないようである。

では霊的側面についてはどうであろうか。ガルトゥングは紛争を転換していく要素として身体（body）や心（mind）レベルだけでなく、より深いレベルであるスピリチュアリティについて触れている。彼によれば、スピリチュアリティとは、本質的（essential）、肯定的（positive）そして知的にも感性的にも、プログラム全体を内省する力（capacity to reflect）と創造力（creativity）を含むものであると言う（Galtung, 2002）。しかし、彼の場合、スピリチュアリティを平和概念の中心に置いているわけではなく、やはり中心は個々人の潜在的実現可能性を妨げる暴力をな

くすことである。

これに対し、スモーカーとグロフの「全体的内面的外面的平和」におけるスピリチュアルピースパラダイムは、内面的（spiritual）平和と外面的（material）平和が相互に結びつき依存し合っている（interdependent）ことが実現されている状態（realization）を表していると言う。確かに彼らの表現からは、平和概念の中心にスピリチュアリティを置いていることはわかるが、スピリチュアリティそのものの定義となると、ガルトゥングの定義以上に漠然としている。また、なぜ内面的平和と外面的平和が相互に影響し合っているというスピリチュアルピースパラダイムが必要なのかについても詳しい説明がない。

この点について、紛争解決の実践家であるダイヤモンド（Diamond）は、次のように述べている。彼女は、平和を、自分の心と魂から放射される特定の振動あるいは存在のダイナミックな状態として体験する、と言う。すなわち次の三つの流れとして捉える。①秩序、調和、統一性（まとまり）に関わる平和の「形而上的」流れ、②平静、静謐、落ち着きに関わる「静けさ」の流れ、③合意、一致、共感的関係（ラポール）に関わる「関係性」の流れ、である。そして①の創造物の秩序、調和、統一性を源泉として、そこから②の内なる平和（私たち自身の内なる静けさ）と③の外なる平和（他の人々との正しい関係を結ぶ能力）を得る機会が生じる、と考える。すなわちこの三つの流れは、どれか一つだけでは不完全で、一緒に働くことによって、個人的かつ集団的に、この自然な秩序に具体的な形を与え、人間のスピリチュアルな発達を促すと考えている（Diamond, 2000）。

さて大雑把ではあるが、平和概念の変遷について眺めてきた。平和という概念は、マクロレベルにもミクロレベルにも広がってきており、やがて霊性（スピリチュアリティ）という統合

的で全体的な存在の必要性を認める方向に向かってきていると考えられる。しかし、では靈性が、暴力を無くすことや、内面的平和と外面的諸平和とをつなげていくことに、どのように影響を与えているのかについては、今ひとつ具体的で明確な説明がない。言い換えれば、なぜ平和概念の中に靈性を含めざるを得なかったのか、その具体的な理由がはっきりしないのである。そこで次に、靈的（スピリチュアル）視点が平和にとって有効である理由について更に詳しく考察してみたい。

2 平和への靈的視点の有効性について

ここでは、先ず暴力が戦争へと進んでいくプロセスについて述べ、次にその暴力を生み出す要因についても考察する。そして最後に、暴力が作り出す戦争というものに対する靈的（スピリチュアル）アプローチの有効性を、具体例を含めて紹介する。

1) 戦争と暴力

戦争の起源については諸説があるようだが、考古学や人類学などの研究によると、人類が穀物農耕を始めた頃と言われている（佐原、1999）。つまり、発掘された遺跡などの調査によれば、穀物農耕を成り立たせるためには、ある程度以上の大きさの集団の中で、その各成員たちが能力に応じた役割を果たしながら組織的に共同作業をしなければならない。このような集団が複数出来、集団同士で紛争が生じた場合、武器を使った暴力もまた組織的共同作業によって行使されたと考えられる。この組織的武力衝突こそが戦争の起源であると言うのである。

この説に従えば、「戦争がなければ平和である」とする考えは、「組織的に武器を使用した暴力がなければ平和である」と言い換えることができよう。しかし、組織的武力衝突の土台に

は、その前から、武力を使わない組織的暴力があり、更にその土台には個人的暴力があったと考えられる。では、この他者や環境に害を与え、個々人が本来持っている自己実現の可能性である潜在的实现可能性を妨げる暴力とは、どのようにして生まれてくるのであろうか。また、本当に暴力さえなければ平和であると言って良いのであろうか。

2) 暴力発生要因と平和

戦争へ向かう暴力はなぜ生まれてくるのか、それらを生み出す源は何なのか。例えば、直接的暴力を生み出す主要因としては、怒り、恐れ、不安などが考えられるし（Nichoff, 1999）、構造的暴力である貧困や差別、さらには環境破壊の要因にもなっている人間の過度の欲望なども考えられる。科学技術の進歩は目覚ましく、人類を何度も絶滅させる武器を生み出し、競争を激化させ、格差の拡大を助長してしまったコンピューターという道具をも作り出してきた。しかし、一方それらを使いこなすだけの人間の心や身体や社会の有り様は進歩してきたであろうか。怒り、恐れ、悲しみ、不安、欲望、服従心などをコントロールするための個人的、对人的方法やシステムを十分に準備してきたとは考えにくい。

仏教では、暴力を生み出す要因にもなる怒りのことを「忿（ふん）」、恐れや不安のことを「散乱」（心の動揺）などと言い、共に「瞋（じん）」（不快な対象への愛着）から生じ、また欲望は「貪（とん）」（好ましい対象への愛着）から生じると言う。これら全ては、人間を悩み煩わし、誤った行為を引き起こし、苦しみを作り出し、迷いの繰り返しの世界に人間をつなぎとめるという意味で「煩惱」と仏教で呼ばれているものである。この煩惱は、人間が生きている限りなくなるものではないが、煩惱の生ずる以前の微細な心に出会うことによって、煩惱が雪だるま式に増長することを防ぐことはできるという（中野、2010）。

しかし、逆にこの「煩惱に囚われること」による煩惱の増長は、具体的には欲望、怒り、恐れ、不安などに凝り固まった状態を持続させ、それらを自分の所有欲を満たすために他者への攻撃という形で行使させる時、それは他者の潜在的実現可能性を妨げる暴力となりえる。その暴力は、前述したように穀物農耕社会の発達に伴い、武力で組織化された集団同士が対立することで戦争へとつながる場合も出てくると考えられる。

例えば、怒りによる囚われは、ある対象に向かいエスカレートし増幅される時、心理的、物理的に危害を加えることで、その対象の自己実現を妨げる暴力へと発展するかもしれない。またその対象が個人にとどまらず国家や民族へと広がり、他の集団を「敵イメージ」として認識し合いだす時、武力紛争の可能性が拡大する。実際、イスラエルとパレスチナの紛争においては、怒りや憎しみが、過去に迫害されたことによる犠牲者性、敵方の非合法化といった社会的信念を作り出し、それがさらにお互いの憎しみの連鎖を生み戦争を長引かせていると考えられる。同様に、恐れや不安に囚われるならば、恐ろしい敵から身を守り少しでも安全なところに身を置きたい一心で武力を持つかもしれない。また所有欲や権力欲、物欲などの欲望に囚われるならば、競争に負け自分の欲しい物を取られることに対する怒りや恐れによって暴力をふるい武力を使うかもしれない。また服従心により、上官の命令に逆らうことを恐れ、捕虜に残酷な暴力行為をするかもしれない (Milgram, 1974)。

このように、欲望や感情などを含む「煩惱への囚われ」が、暴力を生みだし、その暴力が集団へと広がり組織化され武力を伴うことによって戦争を発生させることがあるとすれば、次に、この暴力につながる煩惱への囚われを如何に克服したらよいかが問題になろう。しかも、その克服の方法として霊的 (スピリチュアル) アプローチが有効であるかどうかを検討する必要がある。

それにより、暴力のない状態を平和とする平和概念の中に霊的 (スピリチュアル) 要素を含めることの有効性が見え、更には、霊的平和という概念や定義を明らかにすることが、研究や実践の目標として重要であることも見えてくるであろう。

3) 暴力や戦争に対して有効な霊的 (スピリチュアル) アプローチについて

暴力を振るうことなく、紛争を解決していく方法としては、アサーティヴ・トレーニング (assertive training) のような自己表現法や (小柳、与語、宮本、2008)、非暴力トレーニングにおける紛争解決諸技法 (Coover, Deacon, et al, 1978)、ガルトウングの紛争転換法 (Galtung, 1996) などが既に開発されている。しかし、根の深い欲望や感情を含む煩惱に囚われている場合、そう簡単にこれらのスキルが適用できるとは限らない。

例えば、もっとお金や領土がほしい、もっと地位や権力がほしい、どうしても競争に勝たなければならない、支配せずにはいられない、恨みを晴らさずにはいられない、どうしても許せない、命令に逆らうことができないといった文化や社会構造や生育環境などによって作られた激しく根の深い感情や欲望の中毒状態 (後述する「嗜癖」など) は、アサーションや紛争解決法のプロセスに乗ることすら困難である。つまり、自他の中にあるこれらの煩惱への囚われから一時的にせよ解放される必要が出てくると考えられる。では、この煩惱への囚われから解放されるための方法はあるのだろうか。

(1) 伝統的宗教における霊的 (スピリチュアル) アプローチ

煩惱に囚われることによる現実的苦しみから解放され自我を超えてより高次の自己に達する「自己超越」を目指そうとするならば、そこには伝統的諸宗教が「宗教体験」と呼んでいた数々

の境地とそこへ向かうための訓練法が既にある。例えば、仏教における「涅槃（悟り）」を目標にした座禅などの修行法、ヨーガにおける「サマーディ（三昧）」を目指す各種の体操や瞑想法の訓練、仙道や道教における「虚空」を目指す導引法などの各種修行法、神道における「神靈との合一」を目標にした振魂や禊などの修行法、汎神論の立場をとるキリスト教における「オメガ点への凝集」を目指す祈り、スーフィズムの立場をとるイスラム教における「自分の中の光の発見」を目指すためのスーフィーダンス、などである（瞑想情報センター、1982）。玉城は、宗教の種類は違っていても、その土台となっている宗教体験には共通なものがあると述べている（玉城1995）。

もちろん、いわゆる伝統的宗教における修行法などの実践の他に、煩惱への囚われを克服することを通して暴力や暴力による紛争に対処していく靈的（スピリチュアル）アプローチは、現代においても色々開発されてきている。そこで次に、多様な現代的靈的（スピリチュアル）アプローチの中からその主なものについて紹介する。

（2）現代における靈的（スピリチュアル）アプローチ

マズローは、精神的成長を目指し向上するプロセス（自己実現）において、時に「至高体験（peak experience）」という「最高の幸福感に包まれて歓喜、恍惚、忘我、完全な解放、脱落、絶頂感を味わう精神状態を体験すること」があると述べている。更に一時的な至高体験を繰り返すうちに、高次の認識を保ちつつ静かで安定的に持続する意識状態である「高次体験（plateau experience）」を経験することがあるとも述べている。

また至高体験とよく似た意識状態を表す言葉として「変性意識状態（altered states of

consciousness）」がある。これは、空間、時間、言語、自己、主観と客観の差の感覚などが喪失され（現実性の感覚喪失）、そこから注意集中、恍惚感、宇宙との一体感、受動性などの特徴が、一時的に生じてくる状態とされている（斉藤、1981）。しかし、この変性意識状態が、煩惱に囚われている状態なのか、それともそこからの目覚めを示唆するののかについては、仏教心理学から見てまだ答えが出ていないようである（葛西、2012）。また、至高体験や変性意識状態などによって自我を超えるだけでなく、それを他者とのコンフリクト解決や非暴力行動へと結びつけた靈的アプローチがある。

数多くの成果をあげた非暴力直接行動を実践してきたガンジーは、運動に行き詰まった時などに、よく断食や瞑想を行うことで心身を浄化し、神の真理に出会いサチャグラハ（真理把持）運動を継続していったといわれている（Gandhi, 1955）。このように、ガンジーやその弟子のヴァスタが、「敵と戦うのではなく、愛と正義の行為を通して不正義を取り除く真理の力や良心の力を行使する」と述べる時、それは、彼ら自らで辿り着いた「靈性（スピリチュアリティ）」にもとづく実践であることを物語っていると考えられる。

最近では、ダイヤモンドが、「全体というシステム」と「平和のスピリット」と言うキーワードを使って、個々人が当事者として紛争を解決し、家庭から世界までの平和を構築していく可能性について多くの成功した事例をあげながら説明し、そのスピリチュアルな実践のレッスンを紹介している（Diamond, 2000）。平和に重大な影響を及ぼす暴力について、彼女は、暴力を人間の基本的欲求（愛と承認、安全と安心、所属と成長）が満たされないことに対する後天的な反応とみなしており、それは私たちが分離の心に陥っている時、「全体性」との本来的結びつきを思い出すこと無しに自分自身を「個人」

だと感じる時、はびこるのだと、考えている。従って、暴力の悪循環を断ちきるということは、私たち人間と「平和のスピリット」との結びつきを再確認することで、孤立した欲望や感情などによる煩悩への囚われを乗り越えることではないか、と考えられる。

彼女は、狭量な分離感覚、調和の欠如、対立、葛藤経験に直面しても、「よりよい道がある、平和は可能だ」と心の奥底で「わかる」時、「平和のスピリット(精霊)」と呼ぶ「生きた力(living force)」が出てくる、と考える。すなわち「平和のスピリット」は、私たち自身の神性の現れであり、私たちに本来備わっている全体性の顕現でもあるので、天から降りてくる神々しい存在ではなく、あらゆる人間の心や体験に内在して、破綻した関係を正すという困難なプロセスの中で目覚めさせられる固有の潜在能力、内なる生きた平和の力であるとも、彼女は多くの事例を通して述べている。

また前述した「平和研究」の中で、人類学者の佐藤は、「巫者の平和学」試論という論文において、ある沖縄の巫者(ユタ)が、自身の身体の痛む箇所(腕、背中、腹など)と社会的重圧に苦しむ人々の場でもある地域(基地、グスクなど)と沖縄の島の地理学的場所(名護城、中城、首里城など)とが重なっていることに気付いた事例について報告している。そして、その巫者は、病院で診察しても解明されない自身の痛みを島全体の痛みとして感受し、平和祈願巡りという対処行動を続けることで、心身と島全体の痛みとを緩和していったとのことである(佐藤、2007)。この事例は、ある特別な霊的能力を持ったユタが、戦争という組織的暴力の後でも時間と空間を超えて残る心身の痛みという煩悩への囚われを、祈りという霊的アプローチによって軽減していった例と考えることもできよう。

ここまでは、主に個人的努力によって自己を超越し霊的(スピリチュアル)アプローチに至

るプロセスを紹介してきたが、次に、主にグループワークを通して自己や煩悩を超越する霊的アプローチについて述べることにする。

一見、個人の内的病理現象のように思われている「嗜癖(addiction)」は、実は個人と集団、社会、文化などが密接に結びついた問題であり、グループの力を使った霊的アプローチが有効な精神疾患の一つでもある。「嗜癖(addiction)」とは、その人の存在や生命さえ危うくする悪い習慣で、その習慣を繰り返すうちに陶醉(快体験)を感じるようになり、習慣の維持そのものが目的となっていく本来の利益にそぐわなくなっている状態である(なだ他、2002)。本人が好んでやり続けるうちにやがて自分の意志ではブレーキをかけることができなくなりコントロール不能な事態に陥っていく。例えば、酒や覚醒剤等が止められなくなる「物質嗜癖」、ギャンブルや金儲け、DVなど行為過程が止められなくなる「プロセス嗜癖」等がある。信田は、嗜癖の中には一方が他方を支配し続けようとしパワーゲームの基にもなる「支配嗜癖(control addiction)」があると言う(信田、1999)。これは虐待から戦争に至るまでの多くの紛争や社会的抑圧の水面下の要因になっている場合が考えられる。

シェフは、こうした嗜癖の心理構造が、実はそれを支える「嗜癖システム」と呼ばれる社会環境によって変容を困難にさせられていると述べている。それは、他者をコントロールし、自己中心の価値観で世を律しようとする嗜癖者特有の態度を前提とした嗜癖的な行動を強制するシステムである(Schaefer, 1987)。従って経済体制が資本主義であろうと社会主義であろうと一方が他方を支配し続けずにはいられない破壊のプロセスと構造のある限り嗜癖システムが生まれることになり、やがて暴力や戦争が止められなくなるかもしれない。この悪いとわかっているけれども止められないところが、一般の精神障害と

違う嗜癡の特徴である。

このように、嗜癡や嗜癡システムは、ある種の快楽感からくる煩悩に囚われる嗜癡プロセスを進行させていくと考えられる。シェフは、そこからの回復の方法として、その人のスピリチュアリティ（靈性、higher power、宇宙のプロセス、神の意思とも表現している）を呼び覚ます健全な親密さによる関係プロセスである「リビング・プロセス (living process)」を体験していく実践法を提唱している。日本でも、西野が、グループワークを通して12のステップをグループと共に踏むことで嗜癡システムから回復していく実践法を報告している（西野、2004）。これらは、禪の十牛図にみられるような伝統的な悟りへの実践プロセスとも類似する側面を持っている（横山、1987）。ホーキンスもまた自助グループによる嗜癡の回復には、本当のことを言い、偏見のない心と向上する意欲を前提条件にした何らかのスピリチュアル性が必要であると述べている（Hawkins, 2002）。

しかし、嗜癡者やその協力者である「共依存者」が、一貫性のある明瞭な視点を持つようになるには2年から5年かかると言われる。さらにシステム全体が回復に向かうにはどの位かかるのか、またどうやって回復のプロセスに取り掛かれればいいのか。この疑問に対してシェフは、システム（全体）は個人（部分）よりできていると同時に個人（部分）の中にシステム（全体）が含まれているという「ホログラムのパラダイム」（Wilber, 1982）に基づいて、個人やグループが変化するとシステム全体に変化を生じさせることができると考えている。確かに各個人や各集団がリビング・プロセスに変わることによって全体としての嗜癡システムにも影響を与えることは不可能ともいえない。

嗜癡に対するリビング・プロセスのように、グループワークを通じた靈的アプローチは、他にも幾つかある。

プロセス指向心理学の第一人者であるミンデルは、「ワールドワーク (world work)」というロールプレイを使ったグループワークを通して紛争解決を実践している。シェフのリビング・プロセス同様全体論的立場 (holism) から、「ワールドワークの参加者たちは、体験している紛争の渦中において無意識の深い根を自覚することによって生命の流れを解放し、自然な成長と新たな共同性の創造に関与する目に見えない隠れた内臓秩序とか暗在系 (implicate order) と呼ばれる存在を通して、ミクロな個や集団からマクロな社会や世界に影響を及ぼす」と考えている。従って、例え小さなグループの中で生じた紛争解決でも、それは国家間や民族間の紛争解決に時間や空間を超えて影響することができると考えている (Mindell, 1995)。

またポリネシアに古くから伝えられてきたコミュニティ内における紛争解決の方法として「ホ・オポノポノ (Ho'o Pono Pono)」という一種のグループワークがある。これは、紛争当事者とその関係者、そしてファシリテーター役の長老で一つのグループを作り、長老の第三者的リーダーシップのもと、当事者同士による紛争の振り返り、関係者による振り返り、謝罪、許し、和解、グループメンバーそれぞれのできたことやこれからやれることなどを検討する一連のプロセスを通してコミュニティメンバー全員が満足のいく紛争解決を見つけ出していく方法である。そして本来の伝統的なホ・オポノポノのプロセスにおいては、「祈り」のプロセスが重要視され、呼吸法やイメージを使うことによって各自が「心をゼロの状態 (zero limits)」に持っていくことが求められる (Long, 1948)。このゼロの状態は、紛争解決をよりスムーズに進めるために有効なプロセスであると考えられる。

また最近では、イスラエルとパレスチナの紛争解決を視野に、「マインドフルネス」のリトリートを通じた実践が、イスラエル社会が持つ

「社会的信念：societal belief」（自集団の目的の正当化、肯定的自己イメージの創出、敵方の非合法化、迫害や犠牲者性、愛国主義など）を軟化、転換させる方法として、イスラエルの NGO によって行われている。ここで言う「マインドフルネス」とは、歩く瞑想でお馴染みのティク・ナット・ハン（Thich Nhat Hanh）の思想に基づいて、「今、ここ」にあるものに気付き、あるがままに、それを受け入れることであり、「平和を育てる四つの実践」（①呼吸法、②ウォーキング、③共感的対話、④苦悩の転換）を通して実践されている。また、その効果についても調査が進められている（吉村、2013）。

グループワークとは言えないかもしれないが、集団的瞑想によって暴力的状況を減少させようとする実践とその効果研究も行われている。これは、ある地域の住民のうち1%以上が超越瞑想（TM: transcendental meditation）を一定期間実践すると、犯罪率や事故率、入院率が下がること（「マハリシ効果」とか「1%効果」と呼ばれている）を統計的に立証した実践的研究である（Dillbeck et al, 1981）。この結果を応用して戦争を終わらせようとする集団瞑想による実践も計画されている。

さて暴力の源と考えられる煩惱への囚われを乗り越えるための様々な霊的アプローチを検討してきた。最後に、まだ試みられたという記録のない新しい霊的アプローチとして「霊的（スピリチュアル）集団間交流分析」を提案してみたい。この方法は、前述した地球的霊性である「地球公共的霊性」や「地球域的（グローバル）霊性」（小林、2007）を各国民やその世論を含む地球人全員に啓蒙教育するのに役に立つ霊的アプローチなのではないかと考えられる。

「交流分析」とは、心身医学や臨床心理学等でよく使用される実践方法である。精神分析の口語版とも言われ色々な方法を含んでいる。その一つは、心を、超自我起源と言われる「親の心：

Parent (P) 」と自我起源と言われる「大人の心：Adult (A) 」とイド起源と言われる「子どもの心：Child (C) 」の三つに大きく分け、対人間コミュニケーションを分析したりする「やりとり分析」とか「交流パターン分析」と呼ばれている方法である（池見、杉田、1977）。

多くの場合この方法は、親と子、妻と夫、カウンセラーとクライアント等のように個人と個人間のコミュニケーションを分析するのに使われるが、時には図2のように、教授側と学生側とのある団交場面といった集団間のコミュニケーションを分析する（集団間交流分析）に用いられることもある。

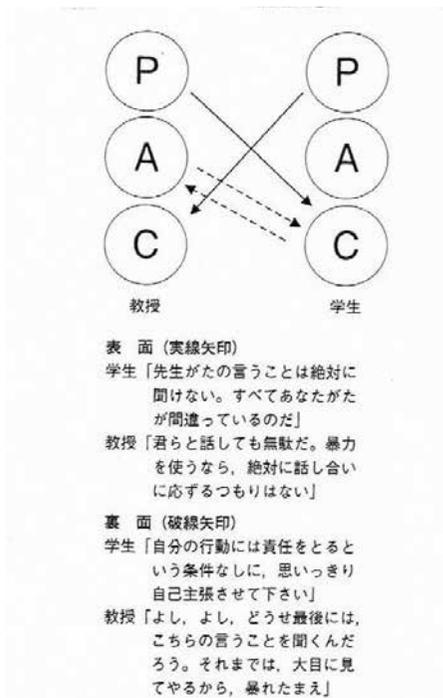


図2 “団交”（池見・杉田,1977）

例えばこの図では、先ず表面的には、学生側が批判的親心で先生方の言うことは間違っているから聞けないと、子供を説教するように言う（PからC）のに対して、教授側もやはり子供を怒るように、無駄だから話し合うつもりは

ない、と厳しく応じている（PからC）。しかしこれは言動に表れているコミュニケーション（実線）であって、心の中では、点線で示されるように、学生側は、子どもが大人に我儘を言うように、責任はとらないけど言いたいことを言わせてくれ（CからA）と思っているのに対し、教授側は、いずれ学生たちは教員側の言うことを聞くようになるという冷静な判断に基づき、それまでは子どもたちが暴れるのを大目に見てやろう（AからC）と思っている。と、このように集団間のコミュニケーションを分析することもできるのである。そしてこの分析結果によって対応策も変わってくることになる。

図3は、この分析法を簡略化した架空の国家間コミュニケーションの事例に応用したものである。もちろん国と言っても国民の中には色々な考え方や思いがある。しかし歴史を振り返ればわかるように、ある時点で国が一定の方針を出すことがある。そして国民はその方針に乗せられることもある。

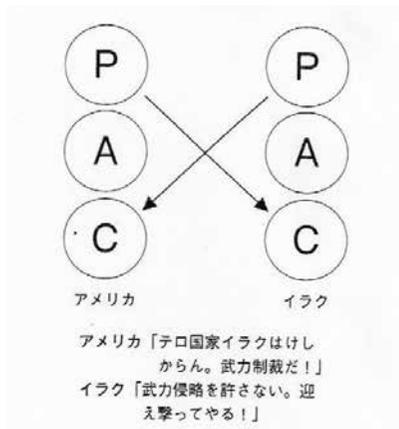


図3 “戦争”

図3において、アメリカはテロを行ったのはイラクであると決めつけ、けしからんイラクに対して武力制裁を行うべきである（PからC）という国の方針を出す。これに対しイラクもま

た、アメリカはこれまでも武力侵略をしてきたのに今回も無実の罪で戦争を仕掛けてくるとはけしからん、懲らしめてやる（PからC）と、開戦に踏み切り向かえ打つ方針を出している。

交流パターン分析では、一般に、両者が支配的な親心（Controlling Parent）で相手の子供心（Child）に制裁を加え合う「PからC」と「PからC」の「交差的交流」は、対立や暴力的抗争に発展しやすいと予想される。従ってこの図のアメリカとイラクの交流パターンをみると戦争の危険を予想することができる。しかもこのような交流パターンになった時、交流分析で重要視されるのは、冷静で合理的な判断を得意とする「大人の心（A）」の活用である。つまり国の方針決定も、十分後先を考えた冷静な合理的判断が要求されることになろう。

しかし国家間の問題に「大人の心（A）」を使う場合は、特に注意が必要であると考えられる。なぜなら欧米的近代自我を基にして作られた大人心は、冷静に将来の国益という欲望を追求してしまう可能性があるからである。国民は国家の中の当事者の一人として国益という所属集団の目的に囚われ安い。いわゆる「集団的煩惱への囚われ」である。そしていつの間にか戦争への道を歩んでしまうかもしれない。そこで、大人の心（A）を超え国や国境を超えたユニバーサルな「スピリチュアル・セルフ」や（James, 1992）、自然も含む万物を創りだしている宇宙意思としての大なるS等の概念（池見、1992）が提唱される必要が出てくる（図4）。

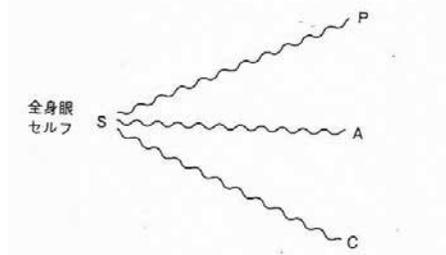


図4 全身眼としてのS（池見、1990）

こうした概念に共通するのは、本能的欲求や感情に基づくC（子供の心）、世間的知性の座であるA（大人の心）、世間的良心や道徳や理想の座であるP（親の心）などの源であり、それらを超越した心（高次セルフ）の重要性である。

すなわち国家間の交流を分析する場合も、これからは宇宙船地球号の住民にふさわしい総合的知性であるスピリチュアル・セルフやSの自覚や覚醒に基づいて行われることが重要であると考えられる。従って、このスピリチュアル集団間交流分析の方法は、地球に住む各国、各民族、各文化の中で更に発展され教育されていく必要があろう。このようにして分析された結果を、戦争が起こる前に世界中のより多くの人に知らせ世論を成長させることで、紛争解決や戦争予防に役立てていく具体的プロセスや実践方法については、今後の課題であろう。

さてここまでは、平和概念の変遷の概観を通して、その概念の中に霊的（スピリチュアル）要素が入り込んできていることを示し、その理由について考えてきた。すると、平和を妨げているものを突き詰めていく先に、暴力発生要因の一つとも考えられる「煩惱への囚われ」が見えてきた。そして、大雑把ではあるが、その「煩惱への囚われ」から解放されるためには、エゴを超えるための霊的（スピリチュアル）アプローチが、有効な場合があることについて紹介し、その可能性についても検討してきた。しかし、これらのアプローチの中で共通して使われているキーワードであり中心的概念でもある「霊性（スピリチュアリティ）」とは何なのか、そして「霊性（スピリチュアリティ）に基づく平和」とは何なのかについては、まだ総合的視点から明らかにされていない。そこで次に、この二つの概念について考察し、定義をしていきたい。

3 「霊性（スピリチュアリティ）」と「全体的霊的平和（ホリスティック・スピリチュアル・ピース）」の定義について

まず、「霊性（スピリチュアリティ）」の定義について考察し、それに基づき、次に「霊的平和（スピリチュアル・ピース）」について考察していくことにする。

1) 「霊性（スピリチュアリティ）」の定義

霊性については、前述した「正の霊性」と「負の霊性」や「平和に向かう傾向」と「戦争に向かう傾向」のように、良いスピリチュアリティと悪いスピリチュアリティとに分ける考え方があるかと思えば、スピリチュアリティは本来悪いものではないとする考え方もある（Battista, 1996）。またスピリチュアリティは人間だけにあるとする狭義の定義がある一方で、動物や植物さらには鉱物や気体などの無生物を含む森羅万象全てに存在するという広義の考え方もある（尾崎、2007）。さらに人間にのみあるとする定義の中でも、①至高体験のようにある意識の変容状態（年齢や意識の段階に関係なくおこる）をさすこともあれば、②意識の発達ラインにおける最高の状態や③意識の自我発達における独立したひとつのラインをさす場合もある。また④博愛的、信頼などの高次の態度、姿勢、人格などをスピリチュアリティと捉える考え方もある（Wilber, 1997）。

筆者は、このように多様な意味を含む霊性を、人間の中だけにあるのではなく、鈴木大拙が「日本的霊性」の中で述べている「物質と精神の土台」や、吉田の「自然のスピリチュアリティ」という考え（吉田、2007）や交流分析における⑤の概念も含め、人間を含む森羅万象全てに宿る性質や力と捉えることにする。この言わば広義の霊性（スピリチュアリティ）のことを、尾

崎に習って「全体的靈性（Holistic Spirituality）」と呼ぶことにする（尾崎、2007）。この「全体的靈性（ホリスティック・スピリチュアリティ）」の主な性質（力）は、以下に述べる「多一性」、「超越性」、「調和性」という三つの概念を使って説明することができよう。

すなわち、スピリチュアリティの持つ基本的な性質として、万物が生まれ多様に別れていく「多様性」と同時にそれらが繋がって一つになっていくあるいはなっている「一体性」があり、この「一即多、多即一」、「色即是空、空即是色」のような表裏一体の性質、状態、プロセスのことを「多一性」とした。従って、稲垣も述べるように、そこには「多様な物質や精神、文化などから超越した根源性」と同時に「人と人を含む多様な精神と物質を結び付ける共鳴的媒介」という両義性があるとも言えよう（稲垣、2007）。そして、この「多一性」が成り立つためには、各々に分かれた多様なもの（自我、男女、個人と社会、コミュニティと都市、地方と国、国家間と民族間、異文化間、人間と自然、生と死、生物と無生物、時間と空間等）の間にある各境界を超えて繋がるため共鳴していく「超越性」が必然的に備わっているのではないかと考えた。しかも、多様になり、お互いの境界を超えて繋がり一体になるプロセスには、更に、平和や非暴力や健康の源でもある自然良能（治癒力）のような「よい」方向へ向かうという価値をもった「調和性」が含まれているのではないかと考えた（松本、2010）。

ここで使っている「よい」という用語の意味は、狭義には、野口整体でいうところの人間を始め生命の中を流れる「気」が滞りなく行き渡る能力を示す「自然良能（自然治癒力）」を起源としている。しかし、広義には、この自然良能の「良」は、生命だけでなく万物の中を滞りなく流れる「気の良い流れ」を意味する。更に、例えば、他者の中にもあるこの良い流れを

回復、保持、増進させようと援助し、促進させる行為のことを「善い営み」とし、両者を合わせて「よい」方向と平仮名で表現したのである。すなわち「よい」方向とは、「良い」方向と「善い」方向の両方を含んでいるのである。

従って筆者は、これからの研究や実践の作業を進めるにあたり、一つの作業仮説として、これまでの文献と瞑想などの実践体験をもとに、多様な意味を含む広義の靈性（スピリチュアリティ）の概念を定義してみることにする。即ち、「全体的靈性（ホリスティック・スピリチュアリティ）」とは、掛け替えのない多様な万物を創造し（多様性）、それらの様々な境界を超越し（超越性）、一つに繋げ（一体性）、多様でありながら同時に一つであるという性質（多一性）を持ちながら、各々においても全体においても何らかの調和したよい方向に向かおうとする（調和性）普通は目に見えない万物の根源である大いなる何か（something great）の様々な状態を含むプロセスであり傾向である」と考える（図5参照）。

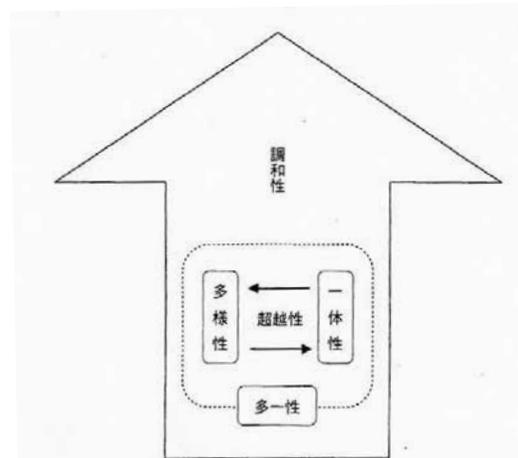


図5 スピリチュアリティの構造仮説

従って全体的靈性によって平和的に紛争を解決していこうとする場合、その各実践プロセスにおいても全体的実践を通して、真の（よ

い) スピリチュアリティの絶えざる解放と育成が重要であると考えられる。逆にいえば、こうしたよい方向に向かう全体的なプロセスが妨げられる時や霊性のある部分的側面のみが歪んで活性化される時に、「負の霊性」とか「悪い霊性」とか「聖戦」と言う名の戦争へ向かう傾向や状態やプロセスが生じると考えられる。

例えば、ガンジーの「断食瞑想」やホ・オポノポノの「心をゼロの状態にすること」は、共に自我境界を超越し(超越性)、前者は、国家間、民族間、宗教間などにおける対立を認め(多様性)、共感と理解を通して繋がり(一体性)、紛争を解決しようとしたし(調和性)、後者は、グループメンバー間の多様な考え方感じ方などを表現してもらい(多様性)、お互いの共感を通して(一体性)、和解(調和性)に至ろうとする点で、共にスピリチュアリティのプロセスに含まれると考えられる。

また嗜癪に対処する「リビング・プロセス」においては、人間の自我形成以前にあり動物の中にも本来備わっているといわれる「超正常刺激」や「誤解発行動」に代表される間違っただけをしようとする傾向(松本、2014)の境界までも超越し(超越性)、本当の信頼関係をつくるプロセスを通して(多一性)、嗜癪改善を目指す(調和性)。同様に、イスラエルにおけるマインドネスのワークや集団交流分析で紹介した⑤による紛争解決の試み(調和性)も、民族、文化、価値観、環境などの多様な境界(多様性)を、共感的な態度によって(一体性)乗り越えようとしている(超越性)、と考えられる。

前述した沖縄のユタと呼ばれる巫者の平和への祈りは(佐藤、2007)、身体、心、社会、地理的場所、歴史的時間と空間といった異なる多様なレベル(多様性)の間にある境界が、ある一人の特別な能力を持った巫者の死者への愛を込めた祈りによって乗り越えられ(超越性)一つに繋がること(一体性)を通して、痛みの緩

和や鎮魂へと向かっていく(調和性)という「全体的霊的(ホリスティック・スピリチュアル)現象」(多様一体超越調和の統合)を生じさせたとして解釈することができよう。

しかも、これらの超越は、ミンデルやダイヤモンド等が、全体論の立場から述べるように、ミクロからマクロのレベルまでの多様な空間や時間の境界(多様性)を超えて(超越性)共鳴し繋がること(一体性)で、紛争解決に至る(調和性)可能性を示唆している。

また、この定義に照らして見れば、戦争にまで発展することのある宗教対立の中には、ある宗教集団の信仰する神などが持つとされる部分的超越性(色々な奇跡や御利益など)ばかりが強調され、スピリチュアリティ本来の掛け替えない多様なものを創りだすと同時にそれらの境界を共感によって超越し調和しようとする傾向やプロセスの追及が怠られあるいは忘れられて、自分の宗教だけが全てで他の存在を認められなくなっている対立状態もあるのではないか。同様に国家が一つの神だけをすべての国民に信じさせようと強制する場合も、神風が吹いて必ず戦争に勝つといったような部分的超越性のみが強調され、多一性に基づく超越性や調和性が無視されていると考えられる。

では近年問題になったオウム真理教の場合どうか。彼らの多くは、色々な修業を通してエゴイスティックな近代自我を超越したかに見えたが、自分たち以外の他者の多様な生き方を認められず殺人という方法で抹殺してしまった。これは、せっかく体験された自己超越感も部分的超越に止まり、それでもなお目の前に現存する自分と違う多様な他者の存在を包み込むこと(多一性のプロセス遂行)はできず、結局対立を超越して信頼という繋がりに至ること(多一性に基づく調和的超越)ができなかったことを意味するのではないか。つまり彼らの境界の超越は部分的な段階で止まっていたにもかかわらず

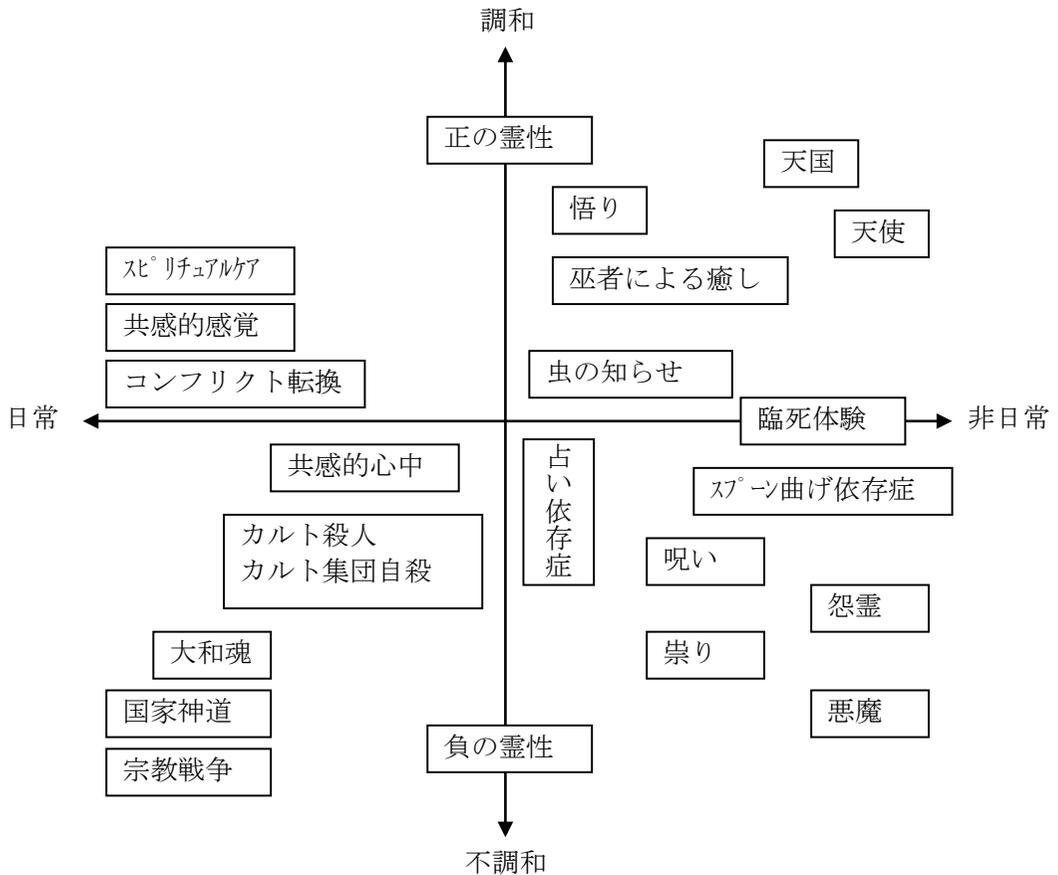


図6 靈性における超越性の「日常-非日常」軸と「調和-不調和」軸による諸現象の分類

ず、スピリチュアリティを極めたと勘違いした結果とも考えられる。

このようにスピリチュアリティ及びその類似概念（真理、真我、大我、宇宙意識、高次セルフ、太極など）を追求する宗教やその他の様々な実践活動（ヨーガ、気功、瞑想など）は、図6に示すように、厳しい修行の末得られた自己超越体験の素晴らしさゆえに、道を誤る可能性がある。

すなわち、まだまだ続くスピリチュアリティの全体へ向かう道を歩み続けること、すなわち多様なもの（多様性）が、その境界を超えて（超越性）繋がろうと（一体性）苦労しながら調和

を目指す（調和性）地味なプロセス（調和、非日常次元）、を止め、超越感覚やそれにまつわる人間関係や集団、組織の保持（煩惱への囚われ）という部分ばかりを追い求め続けてしまう（非日常、不調和次元）と言う前述した一種の「嗜癖」に陥る危険がある（櫻井、2009）。

従って、日常的な現実や自己を超えて至高体験や変性意識状態を体験することばかり追求するのではなく、対人関係に日常的に生じる共感や共鳴のような身近に試みることのできる自己超越（日常、調和次元）を通して、調和性のプロセスを省いていないかを常に確認していく必要が出てくるだろう。なぜなら、超越性は必ず

しもめつたに認知できない非日常的超常現象においてばかり存在しているのではなく、カウンセリングや紛争転換や友人関係においても自他の壁を超え相手の気持ちに共感（振）することを通して自己を超越するという再現性のあるトランスパーソナル（超個人的）現象として体験できるからである。

2) 「全体的靈的平和（ホリスティック・スピリチュアル・ピース：holistic spiritual peace）」の定義

さて、靈性（スピリチュアリティ）というのが、万物に宿る多様性、一体性、超越性、調和性を備えた大いなる何か（以下「多一超調的全体」と記す）であるところの全体的靈性（ホリスティック・スピリチュアリティ）だとする上述の筆者の定義に従えば、この全体的靈性に基づく平和とは、どのようなものであろうか。全体的靈性が、万物に宿る多一超調的状态を含むプロセスであるということは、その部分である身体、精神（心）、社会（対人関係から国や民族までも含む）、人工的環境、自然環境などの各レベルにおいても、時空を超えて多一超調のプロセスが存在していることになる。

例えば、あらゆる生命の体の中にも多一超調のプロセスが、「自然治癒力」として働いているし、人間の精神や心と呼ばれるものの中にも、そのプロセスは、「体験過程」や「レジリアンス」として進行していると考えられる。同様に、このプロセスは、社会的には、対人関係を深めたり、グループを成長させたり、クラスの中のいじめを改善させたり、職場の「組織開発」を推進させたり、コミュニティを「治療共同体（therapeutic community）」に変革させたり、市民の「エンパワーメント」を高め、街を「ヘルシー・シティ（healthy city）」に変貌させたり、男女間や国家間や民族間などのコンフリクトを解決させるために機能していると考えられる。

また環境的には、前述した、人工物と自然との調和を目指す「サブシステム」や「緑のスピリチュアリティ」の中にも、この多一超調的プロセスが流れていると考えられる。

ところで、かつて筆者は、「健康」や「平和」を、理想に向けて発展的に進化していく構成概念（「発展的構成」）として捉え、その類似概念である「幸福」、「安楽」、「解放」、「安全」などと比較した。そして、その比較項目として、「身体的レベル」、「精神的レベル」、「社会的レベル」、「人工物も含めた自然環境レベル」そして今回のテーマであるスピリチュアルに相当する「超越的レベル」を考えた（松本、1993）。その結果、「健康」は、主に関心が「身体的レベル」に始まり「精神的レベル」から「社会的レベル」へと進み、次に「環境的（エコ）レベル」から更に「超越的（スピリチュアル）レベル」へ向かっていると考えられた。一方「平和」の場合は、もともと主に「社会的レベル」に関心の中心があり、最近になって暴力や非暴力の概念を通して「精神的レベル」や「環境的（エコ）レベル」へとそのウイングを広げてきていると考えられた。そして、これからは更に関心が「身体的レベル」や「超越的レベル」へと広がる傾向にあると考えられた（松本、1997）。

ここで前述の全体的靈性（ホリスティック・スピリチュアリティ）の定義をあてはめるなら、超越的レベルの健康に当たる「全体的靈的健康：holistic spiritual health」というのは、「身心（身体と精神）のレベルに主な焦点の当たった多一超調的状态を含むプロセス（性質、傾向、力）の全体」と言えよう。また、同様に、例えば「幸福」の場合は、「全体的靈的幸福：holistic spiritual happiness」となり、「心（精神）や人間関係のレベルに主な焦点の当たった多一超調的状态を含むプロセス（性質、傾向、力）の全体」と言うことができよう。では靈的平和の場合はどうであろうか。

「全体的靈的平和」の場合は、同様に「比較的社会のレベルに主な焦点の当たっている多一超調的状态を含むプロセス（性質、傾向、力）の全体」と表現できよう。すなわち、これまでのことを考え合せた上でこれからの平和の研究と実践のための一つの仮説として定義するなら、「全体的靈的平和」とは、一言でいえば、「ホリスティック・スピリチュアリティ（全体的靈性）に沿った社会」である。もっと詳しく言うならば、それは、「万物に宿る多様なものを作り出す（多様性）と同時にそれらの境界を越えて（超越性）つながり一つになり（一体性）よい方向へ向かっていく（調和性）性質（傾向）が実現されていく状態を含む一瞬一瞬のプロセスを持った主に対人関係、小集団、組織、コミュニティ、国、民族、経済構造、権力構造、サブシステムなどを包含する社会に焦点を当てた全体」といってもよいであろう。つまり万物における多一超調的プロセスの全体は、まず人間における怒り、恐れ、不安、苦痛、欲望などの嗜癖を含む煩悩への囚われから人間を解放することで、主に、对人的、集团的、組織的、社会構造的、文化的、環境的暴力を取り除くか軽減させることができ、それは更に暴力が組織的に武力を行使する戦争へと進むのを防ぐことができると思われる。

従って、全体的靈的平和は、ある一定期間の状态を作り出すこともあるが、奥本が「動的な平和」と呼んでいるように、基本的には動的な（dynamic）プロセスであり流れである（奥本、2012）。そのプロセスは、人間を中心に考えれば、身体的レベル、心理的レベル、社会的レベル、環境的レベル、全体的レベルに存在し発見できる可能性があるとも言える。たとえ人間にとっていつも知覚できるとは限らないとしても、あらゆるレベルに存在する可能性のあるプロセスである。しかもこのプロセスは、時には戦争や暴力の存在する状態においてさえも密かに潜在

して流れていると考えられる。

従って、全体的靈的平和を実現するためには、自然治癒力を生かす「気」や「生体エネルギー」による心身技法（気功法、導引法、野口整体、ヨーガ、ダンス、振魂、禪など）、至高体験、変性意識状態、宇宙意識などの安全な体験法、断食、禅、その他の各種瞑想法や体操、祈り、マインドネストレーニング、平和のスピリットによる紛争解決や非暴力直接行動、呼吸法やイメージ法により心をゼロ状態にして行われるホ・オポノポノ和解法、嗜癖システムから身を守るリビング・プロセスの形成、健全な親密関係を作るスピリチュアル・セルフ・ヘルプ・グループ作り、論理と説得力だけでなく感情や非言語的雰囲気などを含めたディープ・デモクラシー（deep democracy）やワールドワーク（Mindell, 2002）、スピリチュアル・セルフによる集団交流分析法などの更なる開発と各実践者同士の対話空間と時間の形成、各国家レベルだけでなく世界レベルでの教育、実践のためのシステムを創造していくことなどが有効な方法であろう。

例えば、身体レベルで見れば、十分に水分を摂取できなくなった身体は、腰椎にねじれ現象が起これ、これは攻撃性を高めると言われている。しかしこのように暴力につながりやすい身体状態であっても、身体を流れる自然良能（治癒力）は潜在している。整体師はこれをうまく誘導することで水分を吸収しやすい体に変え暴力を予防できるかもしれない（調和性）。またアルコール中毒や薬物中毒による暴力が存在する状態においても、家族会などでの人間関係（多一性）を通して自然治癒力が活性化されよい方向へ向かっていく（調和性）可能性がある。

これらの中毒は、物質嗜癖とも呼ばれ身体的問題であると同時にきわめて心理的な問題でもある。前述したように、関係嗜癖やプロセス嗜癖の中には、他者を支配し続けなければならぬ

ないとか暴力をふるい続けずにはいられない状態に陥ってしまう場合がある。しかし、このような暴力的状態にあっても、嗜癖者が自分の無力さを自覚し、自分を越えた大いなるものに心身を委ねる（超越性）中で、本当の信頼関係を作るリビングプロセス（多一性）を歩み続けることで快方に向かった（調和性）事例がある。

一見、対人関係の問題に見え、またそのように限定されている「いじめ」や「虐待」も、それが国家単位や民族間となると戦争へつながる暴力である。しかもこの中には、戦争によって支配し続けなければ不安になる嗜癖や、金を儲け続けずにはいられないプロセス嗜癖が含まれているかもしれない。また富や土地や資源を得続けずにはいられない、あるいはそれらに依存することを求める嗜癖システムが存在すれば、それは構造的暴力や文化的暴力そして自然環境破壊などをも生み出していくであろう。しかしこうした暴力的な社会や自然環境の中にあっても、人間と人間、集団と集団、国と国、民族と民族、人間と自然などが共鳴しあうことでつながり（多一性と超越性）、大規模なリビングプロセスシステムが開発されていく（調和性）可能性は残されている。言い換えれば、暴力の小さい大きいにかかわらず、またどんなに酷い暴力的状態においても、霊的全体の平和という平和の種や芽（プロセス）が潜在している可能性があるということである。

おわりに

さて今回は、平和を追求する者たちの目標である「平和」という概念を、もう一度振り返って再検討してみようということで、「全体的霊的平和（ホリスティック・スピリチュアル・ピース）」という概念を提案した。この万物の中にあり時空をも超えて遠くから来て遠くまで行く「多一性」と「超越性」と「調和性」をもった「状

態を含むプロセス」を、どのようにして見つけ出し、掴まえ、沿っていけるか、更に嗜癖システムを含む諸煩惱への囚われから解放されるための更なる実践方法の探求や具体的で総合的なシステムの開発とその環境を如何にして創っていけるか、については今後の課題であろう。

戦争がないだけでは平和とは言えない。暴力がないだけでも平和とはいえない。人類一人ひとり、取り分け権力に携わる者たちは、暴力につながる感情や欲望などの煩惱に囚われないように、自分との対話や身近な他者との関係から世界や大いなる何かとの関わりまで、全体的霊的平和の原点に立ち戻って確認し、コミュニケーションする作業を日常的に不断に行ない続けることが、平和という道なのではないか。

文献

- 安藤治・結城麻奈・佐々木清志（2001）「心理療法と霊性—その定義をめぐって」『トランスパーソナル心理学/精神医学』2（1）、1-9
- Battista, J.R., Scotton, B.W., & Chinen, A.B. (1996). *Textbook of transpersonal psychiatry and psychology*, Basic Books. (バチスタ、スコットン、チネン『テキストトランスパーソナル心理学・精神医学』安藤治、池沢良郎、是恒正達訳、日本評論社、1999、254-266)
- Coover, J.R., Deacon, E., & Moore, C. (1978). *Resource manual for living revolution*, Philadelphia: New Society Press.
- Diamond, L. (2000). *Courage for peace :Daring to create harmony in ourselves and the world.* (ダイヤモンド『平和への勇気—家庭から始まる平和建設への道』高瀬千尋訳、コスモス・ライブラリー、2002)
- Dillbeck, M. C., Landrith, & Orm-Johnson, D. W. (1981). The transcendental meditation program and crime rate change in a sample of forty-eight cities. *Crime and Justice*, 4, 25-45.
- Galtung, J. (1969). Violence peace and research. *Journal of Peace Research*, 3. (ガルトウング『構造的暴力と平和』高柳先男・塩谷保・酒井由美子訳、中央大学出版部、1991)
- Galtung, J. (1996). *Conflict transformation by peaceful means: The crisis environment training initiative and disaster management training program of the United*

- Nations. (ガルトゥング『平和的手段による紛争の転換—超越法』奥本京子訳、平和文化、2000)
- Galtung, J. (2002)「宗教、スピリチュアリティとトランセンド」トランセンドワークショップにおける講演
ガルトゥング、ヨハン藤田明史編著(2003)『ガルトゥング平和学入門』法律文化社、49-67
- Galtung, J. 千葉尚子訳(2009)「消極的平和と積極的平和のグランドセオリーに向けて—平和・安全・共生」村上陽一郎、千葉眞編『平和と和解のグランドデザイン—東アジアにおける共生を求めて』風行社、167-193
- Gandhi, M. K. (1955). *My religion*, Navajivan Publishing House. (ガンジー『私にとっての宗教』竹内啓二他訳、新評論、2002)
- 花崎皋平(2004)「サブシステム、ピースフルネス、スピリチュアリティ」『日本平和学会ニュースレター』16(2)、13
- Hawkins, D. R. (2002). *Power VS Force*, CA: Hay House. (ホーキンス『パワーか、フォースか』デラヴィ・エハン、愛知ソニア訳、三五館、2004)
- 池見西次郎、杉田峰康(1977)『セルフ・コントロール—交流分析の実際』創元社
- 池見西次郎(1992)「TAにおけるSの概念」『交流分析研究』16(1・2)、9-7
- 稲垣久和(2007)「スピリチュアリティと平和」日本平和学会編『スピリチュアリティと平和』『平和研究』32、33-50
- James, M. (1992). *Passion for life*. (ジェームス「生きるための情熱」『交流分析研究』深沢道子訳、16(1・2)、1-8)
- 葛西賢太(2012)「催眠・変性意識状態」井上ウイマラ、葛西賢太、加藤博巳編『仏教心理学キーワード事典』春秋社
- 金鳳珍、上村雄彦(2007)「スピリチュアリティと平和への問い」日本平和学会編『スピリチュアリティと平和』『平和研究』32、i-v.
- 小林正弥(2007)「地球公共的靈性の哲学的展望」日本平和学会編『スピリチュアリティと平和』『平和研究』32、71-97
- 黒住真(2007)「平和への問い」日本平和学会編『スピリチュアリティと平和』『平和研究』32、51-70
- Long, M. F. (1948). *Secret science behind miracles: unveiling the Huna tradition of the ancient Polynicians*, Kosmon. (ロング『原点ホ・オポノポノ—癒しの秘宝』林陽訳、ビオマガジン、2010)
- Lovelock, J. (1988). *The ages of Gaia*, NY: The Commonwealth Fund Book Program of Memorial Sloan-Kettering Cancer Center. (ラヴロック『ガイアの時代』星川淳訳、工作舎、1989)
- 松本孚(1993)「健康概念の再検討—超越的健康論への道」『人体科学』2(1)、135-141
- 松本孚(1997)「幸福概念の再検討—実践的理論枠組みとその定義」『人間性心理学研究』15(1)、56-68
- 松本孚(2007)「平和の心理学が問いかけるもの」トランスパーソナル心理学/精神医学会編『スピリチュアリティの心理学』せせらぎ出版、123-138
- 松本孚(2010)「野口整体と私」『トランスパーソナル心理学/精神医学』10(1)、7-11
- 松本孚(2014)「非暴力の視点から見た平和心理学とその可能性について」心理科学研究会編『平和を創る心理学〔第2版〕—私とあなたと世界ぜんたいの幸福を求めて』ナカニシヤ出版、133-152
- 瞑想情報センター編(1982)『現代瞑想の世界』自由国民社
- Milgram, S. (1974). *Obedience to authority: An experimental view*. (ミルグラム『服従の心理』山形浩生訳、河出書房新社、2008)
- Mindell, A. (1995). *Sitting in the fire*, Lao Tse Press. (ミンデル『紛争の心理学』永沢哲訳、講談社、2001)
- Mindell, A. (2002). *The deep democracy of open forms: Practical steps to conflict prevention and resolution for the family, workplace, and world* (ミンデル『ディープ・デモクラシー—〈葛藤解決〉への実践的ステップ』藤見ユキオ、青木聡訳、春秋社、2013)
- Mwangi, G. C. (2002). *Chimurenge: Spiritual attachment to land in Zimbabwe*. *Peace Studies Bulletin*, 21, 9-13.
- なだいなだ、吉岡隆、徳永雅子編(2002)『依存症—35人の物語』中央法規出版
- 中野東禅(2010)『煩惱の整理学—死ぬまで道づれの「迷・惑」な自己』春秋社
- Niehoff, D. (1999). *The Biology of Violence*, New York: The Free Press. (ニーホフ『平気で暴力をふるう脳』吉田利子訳、草思社、2003)
- 西野敏夫(2004)「心理療法と12ステップ」『臨床心理研究』41(3)、65-78
- 西川潤(2007)「心の豊かさ」をどう測るか」日本平和学会編『スピリチュアリティと平和』『平和研究』32、1-32
- 奥本京子(2012)「紛争転換と芸術—動態的平和を模索して」日本平和学会編『平和を再定義する』39、69-89
- 小柳しげ子・与語淑子・宮本恵(2008)『アサーティブトレーニングBOOK—I'm OK, You'er OKな人間関係のために』新水社、69-72
- 尾崎真奈美(2007)「時空を超越したスピリチュアル・ヒーリングとメタレベルとしてのスピリチュアル・ヘルス」『トランスパーソナル研究』9、33-42
- 斎藤稔正(1981)『変性意識状態に関する研究』松籟社

- 佐原真 (1999) 「日本・世界の戦争の起源」 福井勝義、春威秀彌編『人類にとって戦いと1戦いの進化と国家の生成』東洋書林、58-100
- 櫻井義秀編著 (2009) 『カルトとスピリチュアリティ—現代日本における「救い」と「癒し」のゆくえ』ミネルヴァ書房
- 佐藤壮広 (2007) 「「巫者の平和学」 試論—死者の感受と沖縄からの平和祈念」日本平和学会編『平和研究』32、119-136、
- Schaef, A.W. (1987). *When society becomes an addict*, The Lazear Agency, Inc. (シェフ『嗜癖する社会』齊藤学監訳、誠信書房、2006)
- 島蘭進 (2007) 「新霊性文化と平和を志向する社会、政治活動」日本平和学会編『スピリチュアリティと平和』『平和研究』32、99-118
- 信田さよ子 (1999) 『アディクションアプローチ—もうひとつの家族論』医学書院
- Smoker, B. & Groff, L. (1996). Creating global-local cultures of peace. *Peace and Conflict Studies*, 3 (1), 1-31.
- 玉城康四郎 (1995) 『ダンマの顕現』大蔵出版
- Wilber, K. (1982). *The holographic paradigm and other paradoxes*, Shambhala. (ウィルバー『空像としての世界』井上忠、井上章子他訳、青土社、1983)
- Wilber, K. (1997). *The eye of spirit*, Shambhala. (ウィルバー『統合心理学への道』松永太郎訳、春秋社、2004、426-429)
- 横山紘一 (1987) 『十牛図の世界』講談社
- 吉田李佳 (2007) 「環境倫理のスピリチュアリティ—ア概念との関連」『先端倫理研究』2、79-89
- 吉村季利子 (2013) 「イスラエルにおける「平和の文化」の構築—マインドフルネスの実践による市民社会からの意識改革」『日本トランスパーソナル心理学/精神医学会第14回大会プログラム』同志社大学 (京都)、16-17

抄録

「平和」という概念は、「戦争のない状態」という定義から始まり、次第にその内容が変化し、例えば、「暴力のない状態」にまでその範囲が広がってきている。そこで今回は、①まず、これまでの平和概念の変遷を概

観し、②その中で比較的新しく、やや意味が曖昧な「霊的平和」という概念の平和への有効性について検討し、次に、③平和にとって有意義な「霊性」の定義と、その定義に基づく新しい平和目標としての「全体的霊的平和」という概念を考察し定義することを研究目的とした。その結果、「全体的霊的平和」とは、「霊性が持つ万物に宿る四つの性質や力 (①多様でかけがえのないものを生み出す「多様性」、②多様な境界を越えていく「超越性」、③境界を超え一つにつながる「一体性」、④それらをよい方向に向かわせる「調和性」) によって創造される社会の状態やプロセス (対人関係、集団、組織、コミュニティ、国、民族、環境などを含む) に焦点を当てた大いなる何かである。」と定義された。

Abstract

The concept of "peace" starts from the definition "a condition of no war," which gradually changes. It has, for example, broadened to "a condition of no violence." Therefore the chosen purposes of this study were: (1) first, survey the changes in the conventional concept of peace, (2) explore the effectiveness for peace of "spiritual peace," a comparatively new and somewhat vague concept that is among those changes and (3) define the "spirituality" that is useful for peace, and then examine and define the concept of "holistic spiritual peace" as a new peace objective based on the definition of spirituality. As a result, "holistic spiritual peace" was defined as "a great something which focuses on social states and processes (including interpersonal relations, groups, organizations, communities, nation-states, ethnic peoples, and the environment) that are created by four qualities and forces residing in all things, and which are possessed by spirituality ([1] "diversity," which produces diverse and irreplaceable things, [2] "transcendence," which crosses various boundaries, [3] "oneness," which crosses boundaries and links things into one, and [4] "harmony," which steers them in a desirable direction)."

Key words: diversity, oneness, transcendence, harmony, holistic spiritual peace